

Title	空間性に力点をおいた, 都市社会の解明のための理論研究 ; 都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究
Sub Title	
Author	福田, 光弘(Fukuda, Mitsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.85- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ている。

第一に、中山間地域にある資源の再評価をもたらしているということがある。「農業」「自然」「伝統工芸」といった中山間地域に従来から存在していた資源も、これまでは地域社会の内部ではそれほど評価されていなかった。しかし、Iターン者とその資源を評価し移住してくるにより、地域の中においても自らの資源についての再評価をもたらしている。そして、その資源への再評価から、地域社会の再編成がもたらされる可能性もあるのだ。例えば、弥栄村の有機農業を中心とした集落単位での農業、当地での加工と産直販売の導入などは、やさか共同農場とその研修生たちによって触発されたものということができる。また、昭和村の場合、「織姫」制度の反響が非常に大きなことにより、地域での「からむし織」の再評価され、からむし織の振興策がとられるようになったのである。

第二に、今回みてきたようにIターン者の受け入れ地域社会事象へのこだわりがそれほど高くなく、定住というよりもより条件の適合する場所をみつけた時には移動をする「暫定居住」の状態であるとはいえ、彼らの求める条件に適合的な場所とは、別の中山間地域である可能性が極めて高い。つまり、結局は「離都向村」の移動をする可能性が高いのである。

この「暫定居住」をしているとみなされる立場については、それ自身に意味もある。仮にIターン者が仮に地域社会に定住した場合には、Iターン者としての特性は失われ、新しく地域社会の資源の再評価などはできなくなる可能性があるからである。70年代にIターンした

「やさか共同農場」の代表のSさんも、未だに地域社会の中に同化したとはいえず、村の中の政治的な関係には触れていなかった。Sさんは、少なくとも自分の代では「地域と同化することはない」と語り、「我々は、いくら村に貢献しても、生え抜きに離れない」ともいっている。Iターン者は、どこまでいっても地域社会にとっては「暫定居住者」とみなされる傾向があるのだ。

しかし、そのことを「地域社会に定住者として迎え入れられない」というネガティブな視点でとらえるのではなく、それまでの地域社会の論理ではない視点で語ることができるというポジティブな視点に変換してIターンを捉える必要がある。というのも、今まで見てきたように、そうした「暫定居住者」だからこそ、外部の視点によって農村資源の再評価をもたらせるのし、もし地域と自らのライフスタイルがぶつかったときに別の中山間地域にいくという選択肢を選べるのであり、つまりはこの「暫定居住者」としての特性がIターン者の地域社会への効果やその強みを支えているということができるからである。

注

- 1 この成果は、研究ノート土居洋平 細川甚孝 渡邊めぐみ 2002（刊行予定）「中山間地域研究の展開と今後」『Sociology Today』（12）にまとめている。
- 2 これについては、土居洋平「Iターンをめぐる都市の視点と農山村の視点～東京シンポジウム、地方シンポジウムアンケートより～」(社)農村生活総合研究センター『Iターン女性とともに創る魅力的な田舎暮らし：中山間若者定住対策シンポジウム報告書』(社)農村生活総合研究センター、2001年3月、67-84頁を参照のこと。
- 3 事例のそれぞれについての検討は、ここでは省略する。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

- ・空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究
- ・都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究

福 田 光 弘*

第一の研究課題である「空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究」については、H.ルフェーヴルの思想をよりどころに考察を続けてきた。ここで改めて空間ではなく「空間性」とした理由は、本研究が現代世界に特有な空間の性質を探ることにある。よって本研究は、空間そのものの存在論的な根拠を探るものでは

ない。より厳密に言えば、ルフェーヴルが抽出した空間性を明確化するために、現代世界における日常生活すなわち「日常性」の問題を中心に考察してきた。

ルフェーヴルが日常性を記述するさい、そこに空間性はどのような認識論的な意味を持つかを解明することを試みた。そのために、彼の「日常性」を記述する理論枠

組みを詳細に読み解くと同時に、彼と同時代の思想史上の問題形成との絡み合いに注目した。以上の問題関心を、ルフェーヴルの理論の特徴である唯物論的弁証法に焦点を当てることにより考察した。

思想史上の位置関係に関しては、ルフェーヴルの唯物論的弁証法が同時代のフランス構造主義ブームに対する彼の批判的摂取によって錬磨されたものであると想定した。その根拠として、彼の一連の都市理論・空間論が発表された時期は、構造主義への批判的著作が多発した時期と重なり合ったことがあげられる。さらに構造主義をテクノクラートのイデオロギーであるとするルフェーヴルの議論の中には、パリの都市再編成やフランスの国土開発を具体例としている。ルフェーヴルによる構造主義への批判の論点は、端的にはその構造形式への過度の還元にあった。しかしルフェーヴルは、構造主義者達の語る空間がいかに抽象度を高めたものであろうとも、全く経験的内容を消去したものであるとは考えなかった。彼の批判の中心は、構造主義が標榜する不動かつ「純粋な構造形式」への欲望であった。それゆえに、構造主義が標榜したヘーゲル主義批判ならびに科学的認識論への執着に対しては、好意的な評価をした。特に空間についての理論上の親和性は強いものであった。例えば M. フーコーの空間論とは、概念構築の手法に多くの共通点をもつ。さらに何よりも、ルフェーヴルの理論展開における認識論への配慮は、構造主義との対決により深化されていることがあげられる。

彼の弁証法は唯物論であるという性格上、つねに概念抽出を行うさいに何らかの具体性をはらむことに着目した。弁証法で措定される「肯定」「否定」「否定の否定」という三項は、それぞれ具体的・経験的な内容をもつ具体的かつ抽象的なものであるということになる。そして通常の弁証法において措定される第三項、すなわち「否定の否定」として統合をつかさどる項は、観念的に措定された内容をもたないものではなくなる。そして肯定－否定の二項が対立・矛盾する現在に共時的に存在するものということになる。第三項を未来に投企するのではなく、共時的に措定される具体的かつ抽象的なものであることは、歴史の展開を第三項に託するという、弁証法に固有な論理を放棄するものではない。ルフェーヴルはここで全体性と全体化を区別することで、彼の論理の中で時間が展開することを排除しなかった。

ルフェーヴルは全体性を過去に見いだされるものであるのに対し、全体化とは時間の継起の中に常に潜在的なものとして措定されるとした。それにより時間の

継起が可能とするかもしれない、現在では予測不可能なものが、現在や過去のイデオロギーの中で表象されることでそれらイデオロギーに回収されること避ける。さらに現在生起している経験的なものや具体的なものが持つ表象不可能な性格を、何らかの説明で語り尽くすのではなく、その表象不可能性を担保にしつつ記述を行うことが可能となる。こうしてルフェーヴルにより記述されたのが、現代世界における日常生活であった。それゆえに日常性には常に表象不可能な第三項が担保されている。

三項を共時化するということは、不可塑で単線的な時間の流れを止めることになる。なぜなら、概念が含むであろう経験的な内容は、概念が形成された「今」のものであるからだ。さらに時間は常に空間をともなって私たちの世界を構成するから、時間を止めてしまえば、その瞬間に残るのは「今」という一点での空間上の拡がりのみである。よって私たちに「今」与えられる認識枠組みとは、空間の拡がりを認知するものであるといえる。換言すれば、認識の拡がりや、その認識により経験として認知されるものの範囲は、空間的な拡がりであると言えよう。ルフェーヴルが、現実の中に対立・矛盾を見いだすために適用される二項のみならず、第三項までも共時化させる意味とは、以上のような認識と空間の関係を露わにすることともに、今後進展していけよう未来が現在という瞬間の中に、潜在性として胚胎していることを明らかにするためであった。このことから彼の唯物論的弁証法とは、人々の認識の中に、彼ら彼女の生きた時代特性を担う空間性が浸透している、ということを示しようとする試みであったことが理解されよう。

以上のような整理を経て、ルフェーヴルが現代都市・空間を探るにあたり組み立てた「空間の生産」という概念を読み解くと、現代世界では時間よりも空間のほうが主要な構成契機であることが判明する。それにたいし時間は、空間が主要な構成契機であることを隠蔽する役割を担うものとされる。この点については、現代世界における空間表象の複数性と時間表象の単一性という論点を見いだした。

空間の優位性については、認識の拡がりは空間的な拡がりであるということからも説明できる。ある支配的なイデオロギーは認識の拡がりに何らかの制限を加えることで現実を構成したことを考えてみよう。そうした制限の具体例として、時間のみ到时計時間という純粋な形式を措定することで、時間-空間から空間を切り離し、全世界に標準化したことがあげられよう。時計時間は現代社会における人々の活動を組織するための不可欠な手段と

なっている。しかし活動を組織する手段であるということは、活動を行う目的ではないことを意味する。言い換えれば、人々の活動が行われなければ、純粹形式を標榜する時計時間はいかなる意味も持たないということである。このことは、人の住まない陸地や船の通らない海を考えれば理解は容易となろう。このような「見捨てられた」地球上のある部分は、時計時間以外に時間の経過を示す枠組みを今も昔も持たない。さらにそうした空間は、人間の活動を全世界的に組織するうえで、なんらかの利用可能性を考えることができるようになったゆえに、意味を持つこととなった。このことから空間認識を支配することが、人々の活動を効率的に制御するとき、非常に大きな意味を持つということが明らかになる。ルフェーヴルが「空間の生産」概念により、あえて空間を問題にするのは、時間中心の認識枠組みを問い直すためであった。それにより、建造環境としての生産される空間形式だけでなく、認識の拡がり制限するイデオロギーをも批判することを可能とした。

こうしてルフェーヴルの唯物論的弁証法と空間の問題との関連性が明確となった。この関連性をもとに、第二の課題である「都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究」は考察された。具体的対象は、生産される建造環境としての現代グローバル都市における空間性である。グローバル都市のもっとも顕著な空間性についての論点は、不均等発展である。

ニューヨーク、ロサンゼルス、ダウタウン地区、東京の臨海副都心、ロンドンのドッグ・ランド地区、パリのデファンス地区などの、グローバリゼーションや情報化をもっとも反映させた空間は、それぞれの建造環境としては、非常に似かよっている。さらにそれらの都市は純粹形式を標榜する時計時間の性格を最も極端に示す。そこでの活動は時計時間が定めた現地時間により調整されるのみではなく、金融フローなどのヴァーチャルなものを制御する時計時間により調整されている。さらにそれらのグローバル都市は、その機能を当初から意図されることで建設されたものである。そして、これらの地区を取り巻く建設計画外の地区との差異は、当初から意図された不均等発展に依拠している。ここにも時間の画一性が空間の不均等性を隠蔽する具体的な例を見出せる。

こうした不均等発展を理論的に考察し、空間分析に適用しているのが、英語圏における批判地理学の昨今の傾向であった。それらには D. ハーヴェイ、E. ソジャ、D. グレゴリー、R. シールズなどの研究があげられる。これらの著名な研究者の手による研究のなかで、ルフェーヴルの手法は多大な示唆を与えるものであるとして特筆されている。こうした研究動向をふまえ、グローバリゼーションや情報化の波を受けたなかでの、現代都市の意義を、経験的かつ歴史的に把握したいと考える。現状は文献徴集を通して、経験的研究の対象を模索している段階である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程